ずめからきいて來たのです。ある夕方、わたしがすずめたちにお話をしてもらったら、こういうごとを話してくれたのですよ。

＊デンマーク（一八〇五―一八七五）

206　おさるのめがね

クルイロフ＊

おさるが、だんだん、としをとって、目がわるくなりました。ものをみる力が、きゅうによわってきたとみえて、なにをみても、ぼんやりして、かげのようにしかみえません。

「目がみえない、目がみえない。」

こういって、じだんだふんでいるのを、にんげんが、きのどくにおもって、おさるの目をみてやりました。

「なあに、この目はまだ、まるでだめになったというほどでもない。めがねをかけなさい。そうすると、またものがみえてくるよ。」

おさるは、おおよろこびで、さっそく、まちへでかけて、めがねを半ダースも、かいこんできました。

「これだけあれば、なんだってみえる。」

おさるは、とくいなかおをしながら、めがねをたてにしたり、よこにしたり、うらがえしにしたり、まっすぐにしたり、ゆがめてみたりしました。それから、ひとつを、ひたいの上にかけました。もうひとつを、しっぽにぶらさげました。りょうてとりょうあしのゆびのあいだに、ひとつづつはさんで、ふりまわしてみました。でもいっこうに、なにもみえてはきませんでした。

おさるは、そそかしくて、めがねをどこへかけるのか、きいておくことをわすれたくせに、にんげんのわるくちをいいはじめました。

「にんげんなんて、ろくなものじゃあない。あいつのでたらめになんか、もうだれだってだまされるものじゃないぞ。」

おさるはこうさけびながら、かんしゃくまぎれに、めがねをかたはしからたたきつけました。めがねは、ひとつひとつ、いわにあたりました。こなごなにこわれたガラスが、ちかちかひかりながら。けしとんでしまいました。

どんなやくにたつ、しなものでも、そのつかい方もねうちもわからないひとには、おさるのめがねとどうようです。

207　四部合奏

クルイロフ

茶目公のおながざると、やぎと、ろばと、それからぶかっこうなながにまたのくまのミシュカとが組んで、四部合奏をやらかすそうだんがまとまりました。さっそく、ほんしきに、それにいる楽器を――バイオリンが二ちょうと、アルトのが一ちょう、コントラバスのが一ちょう、ちゃんと買いととのえました。さて、一同そろって、ぼだいじゅの下の野原にどっかとすわりこみました。いちばん、あっぱれな妙技で、世間をあっとおどろかそうといういきごみでした。そこで、みんなバイオリンの弓をかまえると、氣をそろえて、

いちどに、きいきい、ぶうぶう、やりだしました。ところが、それはただそうぞうしく音を立てるだけで、調子にも音楽にもなってはいませんでした。

「おい、やめろよ、兄弟、やめろったら。」と、おながざるが聲をかけました。「まあ待て。どうもそれじゃあ音楽にはならないんじゃないか。どうすればいいのかな。とにかく、きみたち、そんなふうにすわったのではだめだということはわかっている。おい、ミシュカ、きみはバスだから、アルトとむきあってすわれ。ぼくは、第一バイオリンだから、第二バイオリンと向きあおう。それでやっと、まるでちがった音楽になろうというものだ。それこそ、山でも森でもおどりだすくらいなものだ。」

そこで、そのとおり席をすわりなおして、またはじめました。ところが、たれの出す音もあいかわらず調子がはずれていました。

「ちょっと待ってくださいよ。」と、こんどはろばがいいだしました。「どうもぼくには、こつがわかったようだよ。こりゃあきっと、一れつにならぶと、うまく調子が合うだろうぜ。」

みんな、このいけんにしたがって、一れつにずらりとならびました。それでも四部合奏が音楽にならないことはあいかわらずでした。そこで、たれがどこにどうすわるがいいか、そのあらそいがよけいやかましくなって、てんでんにがやがや、わやわや、大さわぎにな

りました。あんまりそうぞうしいので、ちかくの森から小夜啼鳥がとんで來ました。なかまは、さっそくそれをみつけて、なんとかこのもんだいを片づけてくれとたのみました。

「まあお願い申しますよ。」と、なかまは口をそろえていいました。「しばらくがまんしていてください、そしてぼくらの四部合奏のいけないところを直してもらいたいのです。このとおり譜はあるし、樂器はそろっているのです。ただ、どう席をきめればいいか、それだけおしえてもらえばいいのです。」

けれど、小夜啼鳥のへんじはこうでした

「どうも音樂家になるには、あなた方とはちがったちえのはたらきがいりますし、ずっとこまかい音をききわける耳がたいせつでしょうね。まあ、そんなわけですから、みなさん、いくら席だけをああのこうのいってみたところで、あなた方では、いつまでたっても、どうも音樂にはなりますまいね。」

206 木の葉と木の枝

クルイロフ

夏のはじめの晴れた日です。

やわらかなそよ風が、梢の葉の上をそよそよふいてとおりました。崖の上に一本の大本がありました。青あおとしげるだけしげった若葉のかげを、下の谷いっぱいにひろげながら、木の葉はとくいらしくいいました。

「どうだね。われわれのこのさかんないきおいは。たれもいうとおり、これこそこの谷の名譽なり誇なりだろうじゃあないか。こう、どの木もうっそうとさかんにのびて、壯觀とも美觀ともいいようのない有樣は、まったくわれわれのおかげなのだ。葉のまるでない、から坊主の木なんて、およそあわれなものさ。そうだとも、自分ながら自分をいくらほめても、だれもとがめるものはないだろうとおもうよ。それ、われわれがこうしてすずしい蔭をつくればこそ、羊飼でも、馬方でも、來て休む、ながい旅につかれた人も、あつい夏の日中、この下でひるねの夢もむすばれようというものだ。みずみずした青葉若葉がかさなり合って、いわば天然のうつくしいあずまやをつくればこそ、百姓の女たちもその下にあつまって踊る。朝は朝で、若葉をもれるお日さまの光の中で鶯がさえずる。夕方はまた、たそがれの影をしたって、小夜啼鳥が葉かげで夜の歌をうたう。みたまえ、きみたち、そよ風だって、つい氣持がよくて、われわれのそばでいつまでも吹いていて、はなれようとはしな

いだろう。」

木の葉のおしゃべりは、させておくときりがないとおもわれました。でも、そのとき、ずっと下の根もとのほうから、きこえないほどかすかな声で、さえぎるものがありました。

「もしもし上の葉っぱさんたち、ここはひと言、われわれのほうへも、なかま同士、ごあいさつがあってもいいところだろうよ。」

「だれだ、ぶしつけ千萬な。われわれのなかまに加えろなどといいだすやつは。そこで虫のなくような聲で、なにかぶつぶついっているやつは、いったい、だれだ。」

葉のなかまは、がやがや、ざわざわ、木の上ですりあいながら、おこって、つぶやきました。

すると、下からまたこたえていいました。

「ああ、わしたちはな、こうしてこの地の下のまっくらな穴ずまいをしながら、せっせとお前さん方のためにたべものをはこんでやっているものだよ、せんたい、お前さん方が、われわれのなにたるか知らないという法があるかい。お前さん方がそうやって茂りさかえているのは、親木のあるおかげだし、その木は、われわれ木の根がこうしてささえているのだ。お前さんたち、ひとりでとくいになって、自分の美しいじまん話をするのはかまわないが、ただおたがいの間に、べつべつの役目が、わりあてられていることを忘れておくれでない。

それは毎年春がくれば、枝のさきにわかい芽がもえだして、やがて新しい葉がしげる。だが、それもわれわれ根が、土の中でこうして生きていればこそで、いったんわれわれが枯れれば、木の葉もなにもないのだということだ。」

209 幸福の訪問

クルイロフ

幸

福は、いつも王さまや貴族のりっぱな御殿にばかりお客に行くとはかぎりません。それは氣がむけば、あなた方のまずしい小家の窓をも、にこにこしながらのぞきこんで　氣がるく、

「こんにちは、どうだね。しばらくお客においてもらえないかね。」と、いうこともあるのです。だがおたがいに、そういううまい時をにがさないようにしなくてはなりません。それは幸福の訪問は人間の目にみえないし、お客にきている間も、ごくみじかくて、どうかすると五分か十分でかえってしまうこともあるからです。でも、そのわずかな間でいいのです。幸福をお客さまらしくたいせつにあつかったものには、お禮に、それからなん年もよい

ことがつづきます。そのかわり、その機會をはずしたら、もうそれなり、二どと幸福の訪問をうけることはないでしょう。

都の町はずれに、古ぼけた一けんの小家があって、そこに三人の兄弟がすんでいました。ところで、この三人が三人ながら、びんぼうしていました。

「なにをやってみてもだめだ。幸福に見はなされたのだ。」

三人はてんでんにこういって、いつも幸福をうらんでいました。

三人がいつまでも不幸でいるので、幸福も氣のどくになりました。そこでげんきをつけてやろうとおもって　ある年の夏、そっと、三人の小家を訪問しました。そしてその夏じゅうずっとお客になっていました。

ほんとうに夏じゅう、幸福はそこにいたのですよ。

さてこのめずらしく長いとうりゅうの間に、三人の兄弟たちの運命にも、おたがいにへだたりができました。

ひとりの兄弟は、まずしい小賣り商人でしたが、幸福がお客にきている間、せっせと商賣を勉強しました。勉強して商賣をすればするほどお金がもうかって、とうとう今ではこの國でたれしらないもののない大金持ちになりました。

つぎの兄弟は、お役所につとめていました。幸福がお客にきている間、この兄弟は、毎日のあつさにもめげず、せっせとしごとをはげみました。そこで一ばんみぶんのひくい書記からだんだん出世して、とうとういちばん上の大臣にまでなりました。いまでは大きな木や廣い庭のあるべっそうをいくつももって、おおぜいの人にそんけいされています。

ところで、三ばんめの兄弟はどうしたというのですか。むろん、幸福はお客にきている間、この兄弟のためにも、それは寢るひまもないくらい働いてやっていたのです。

ところがその夏じゅう、この兄弟は、毎日ぶらぶらして、はえばかりとっていました。

この兄弟はこれまでも、はえをとるのが、かくべつじょうずであったかどうかしりません。とにかくその夏の間だけは、それこそ幸福がそばについているおかげでしょう。百發百中——というように、手をあげれば、かならず一ぴきのはえがとれました。

さてこういうわけで、してやるだけのことをして、じゅうぶんまんぞくしたお客さまは——幸福は、ある日、秋風がさそいにくると、氣がるにつれだって、どこか遠方へ旅に出て行きました。

ところで、まえにもお話したように、こののち、三人きょうだいのふたりまでは、だんだん運がよくなって、お金持ちになり、大臣になって、幸福の訪問を心から感謝していまし

た。ただひとり、三ばんめの兄弟だけは、自分ひとり幸福の訪問をうけなかったといって、あいかわらずびんぼうしながら、幸福をのろっています。

でも、幸福はひと夏じゅう、汗みずくになって、いっしょにはえを おっていてやったのですのに。

210 たこの じまん

クルイロフ

強い北風の背にのって、たこが、大空の上まで、いきおいよくあがって行きました。

「高いな。高いな。もうじき雲のところまでとどいてしまう。」

たこは、とくいになって、目の下の世界を見おろしました。するとはるかに遠い谷間に、白いちょうちょうが一ぴき、ひくくとんでいるのをみつけました。

「なんだ、ちょうちょうさん、おまえさんだったのかい。ここから見ると、あんまりちっぽけで、ごみがとんでいるのかとおもったよ。どうだ。おまえさんもさぞこんなに高くとんでみたいだろうな。」

たこが、こういうと、ちょうちょうは、すましたかおで、

「ありがとう。大きにおせわさま。いくら自分だけは高いつもりでも、おまえさんは糸でつながれているのだよ。ひくくても、自分のじゆうにどこへでもとんで行けるわたしのほうが、どれほどしあわせだかしれはしないよ。」と、いいました。

＊ロシア（一七六八―一八四四）

211 山と小りす

エマスン＊

山と小りすが　　けんかして
山は小りすを　　「なまいきな
ちび小僧(こぞう)が。」　　といいました。
小りすもまけずに　　いうことに、
「なるほど、　　きみは大きいよ。
だがこの世界は　　より合いじょたい、

一年三百六十五日
お日さまもてる、
ぼくは、ぼくなり
めいよの場所だと
ぼくは、きみだけ
きみも、ぼくだけ
半分だけも
小りすの通れる
つくってくれるが
めいめいちがう
じょうずに生かして
森をせなかに
くるみのからを

雨もふる。
ぼくのばしょ、
おもってまもる。
大きくないが、
ちいさかないし、
はしこかないよ。
りっぱな道を、
山のはたらき、
才とはたらき
つかうが世の中。
のせるな山で
わるのはりすだ。」

＊アメリカ（一八〇三―一八八二）

212

かしわの木とはしばみ

トルストイ＊

森の中で、いちばんのおじいさんのかしわの木が、ある日、どんぐりの実をひとつ、ころんと、はしばみの葉の上に、おとしました。はしばみは、そのとき、はるか下からあおむいてみながら、ぶつぶつ小言をいいました。

「お前さん、そんなに慾ばって、いっぱい枝をひろげているくせに、ほかに場所がないんですかい。そんなちいさな実のひとつぐらい、どこかあいた地面の上におとしたらいいでしょう。こっちは、じぶんのうちの枝だけも、十分ひろげる場所もない始末だ。そのくせ、わたしのかたい実は、人間のお役にずいぶんたっているんだ。」

かしわの木のおじいさんは、しかし、ゆったりした調子でいいました。

「だがの、わしはこれでもう三百年も生きておるよ。いまおとしたどんぐりから、やがてわかいかしわの木がそだってのびて、これもまた、そのうえになん百年と生きて行くことだろうよ。」

そうきくと、はしばみは、よけい腹がたってきました。

「よし、じゃあそのわかいかしわの木の息のねを、いまのうち、おれがとめてやる。もう三日とは生かしてはおかないぞ。」

はしばみが、こういっていきりたつのを、かしわの木はそれなりききながしていました。でも、ちいさいかしわのこどもには、氣をつけて、はしばみのそばへはよるなといって、いましめました。

どんぐりはやがて、土のしめりをうけて、ふくれて、からがわれました。われ目から鉤のような根がでて、それがしっかりと土地をつかむと、そこから新芽がもえだしました。

はしばみは、どうかしてこの芽をおしころそうとかかりました。その上に葉をかぶせて、蔭にして、お日さまの光のあたるじゃまをしようとしました。でも、わかいかしわの木は、空にむかって、ぐんぐんのびて、くらいはしばみの藪蔭で、つよくしっかりと育って行きました。

百年、それからたちました。はしばみの木はとうに死んでいました。ひと粒のどんぐりから成長したかしわの木は、天にもとどくくらい高くのびて、いきおいよく、八方にその天幕をひろげました。

213 めくらと牛乳

トルストイ

めくらが、目あきにたずねました。

「牛乳って、どんな色をしていますか。」

「それは白い紙のような色だ。」と、目あきはこたえました。

「すると、その色は、紙のように、さわると、がさがさいいますか。」と、めくらはいいました。

「いいや、それは、白い粉のような色だ。」と、目あきはいいました。

「すると、粉のように、やわらかで、さらさらしているのですか。」と、めくらはいいました。

「いいや、ただ白いのさ、兎の毛のようにね。」と、目あきはこたえました。

「すると、それは、兎の毛のように、やわらかで、ふわふわしているのですか。」と、めくらはいいました。

「いいや、白いというのは、そっくり、雪のような色なのだよ。」と、目あきは、こたえました。

「ははあ、すると、それは、雪のように、つめたいというわけですか。」と、めくらはいいました。

さて、こんなわけで、目あきが、あれだこれだと、いろいろならべ立ててみたものの、めくらには、やはり、牛乳の色が、ほんとうには、わかりませんでした。

214　本

トルストイ

ふたりの男が、おうらいにおちている、一さつの本をみつけて、てんでんにじぶんが、さきにみつけたのだから、じぶんのだといいあらそいました。

そこへもうひとりの男が、とおりかかりました。

「きみたちのうち、本のよめるひとがあるのかい。」と、その男は、たずねました。

「おれは、よめない。」と、ひとりはいいました。

「おれも、よめない。」と、もうひとりもいいました。

そこで、あとから來た男がいいました。

「では、なんだって、この本のとりっこして、けんかするのだ。それでは、あたまに一本も毛のない、はげあたまどうしが、一本の櫛で、けんかするようなものではないか。」

215　うたのない　世の中は　つまらぬ　世の中

トルストイ

アートの、二かいのへやに、お金もちの紳士が、住んでいました。その下のへやには、まずしいしたてやさんが、住んでいました。したてやさんは、よるも、ひるもなく、だいにむかって、せっせとしごとをしました。しごとにあきると、うたをうたいます。それで、げんきがつくと、うたいながらしごとをつづけます。うたっていると、だんだん、たのしくなって、いくらでも、しごとがはかどりました。

お金もちの貴族は、一日そとに出て、あそんでくらして、よるおそくかえります。それから、ねむろうとすると、下でしたてやさんが、おもしろそうに、うたをうたいました。

「うるさいなあ。とてもねつかれん。」

貴族は、ぶつぶつ、こごとをいいました。

「おい、したてや、うたをやめてくれないか。そのかわり金をやる。」
貴族は、たくさんお金を、したてやさんにやって、うたをやめてもらいました。
したてやさんは、お金もちになったので、にこにこしながら、それでも、あいかわらずせっせとはたらきました。でも、やくそくをまもって、うたはうたいません。だんまりで、こつこつ、しごとをしました。
ところが、そのあくる日から、もうしたてやさんは、うたいたくなりました。
「お金なんか、なくったっていいや。やはり、うたをうたってしごとをしているほど、世の中にたのしいことはないなあ。」
したてやさんは、そういって、もらったお金をかえしました。そうして、また、ようきにうたいながら、しごとにせいをだしました。

＊ロシア（一八二八―一九二〇）

216 おたまじゃくし と かえるの問答

スチブンスン ＊

「まあ、おまえ、じぶんでじぶんがはずかしくはないかい。そんなみっともないしっぽなんかはやしてさ。」と、かえるがいいました。「わたしが、おたまじゃくしで

あったときは、そんなしっぽなんかなかったものだ。」
「そうだろうとおもいましたよ。」と、おたまじゃくしはいいました。「だから、やっぱり、あなたは、おたまじゃくしだったことなんかなかったのだ。」

＊イギリス（一八五〇―一八九四）

217 釣に出た あにいもうと

アナトール フランス ＊

夏

休で、學校のないじぶんです。毎朝ジャンは、妹のジャンヌとふたり、釣竿を肩にかついで、びくを腰にぶら下げて、近所の池や川のふちへでかけました。
ふたりの住んでいるいなかは、ひと口に、「水の國」といわれるほど、どこへいっても沼や池があり、そのあいだに、水晶をとかしたかとおもうような、きれいな川がながれていました。びろうどのようにつやつやした草が、岸にいっぱいはえて、あまりつよく日の当らない、いつもうっすりかすんだような空のなかに、大きな柳の木が、銀色の葉を光らせていました。
川の水のきれいなことも、川の岸に、やわらかかな草がいっぱい生えていて、どこへで

もいって、ねころぶことのできるのも、うれしいことのひとつでしたが、それよりも、川の中に、かわいらしいおさかなが、たくさん住んでいて、底の見えるほど澄んだ水の中に手を入れると、二ひきや三びきは、わけなくしゃくえそうなのが、なによりのたのしみでした。

きょうだいは、川のふちにおりると、そこの柳の木のかげに腰をおろしました。釣道具の包を、にいさんがほどくと、妹はすばやく、糸やはりを釣竿につけたり、えさの箱をあけたりしました。あいにく、ふたりのあいだに、竿が一本しかないものですから、もうくるとさっそく、たれが先に竿をつかう、つかわないで、けんかになって、にいさんは手にみみずばれをこしらえたり、妹はほほにちょっとした赤あざをつけられたり、しずかな川の上にういているおさかなたちが、びっくりして水底にしずんでしまうような、大さわぎをはじめました。そのうちおたがいに、いつまでもけんかの勝負がつかないので、あきてしまうと、こんどはなかよく、竿のかしっこをすることになって、これでやっと平和が回復されました。なんでも、前の番で一ぴきおさかながつれたら、すぐあとの番に竿をわたす約束で、さいしょ、まず、ジャンから竿をもつことになりました。

ジャンは釣をはじめました。でもいつ釣をよして、妹に竿をかすか、まるっきりけんと

うのつかいなことでした。妹とむすんだ約束を、おおっぴらで破ることはしないかわりに、ひれつな策略で、いちど手に入れた権利を、いつまでもひとにわたすまいと、かかりました。なんでも、妹に竿をとられまいと、いじわるくたくらんで、せっかくおさかながえさをつつつきにきても、わざと釣らずに、竿のさきで藻をいじくったり、小石をはねかえしたりしていました。

にいさんもずるいのですが、妹もずいぶんしんぼうのいいことでした。なんでも六時間は、待ちどうしに待っていたでしょう。でも、とうとうおしまいには、なんにもすることのないのに、あきあきしてしまいました。そこで、大きなあくびをして、両足をうんとふんばって、柳の木のかげに横になって、目をふさぎました。ジャンは、これをそっと横目にみて、(ジャンヌのやつ、とうとう、くたびれてねてしまったな。)とおもいました。

ふと、釣糸がゆれて、うきが沈みました。ジャンがぐいと釣糸をひくと、そのさきが、ぴかりと銀色にひかりました。あゆが一ぴき、はりにかかったのです。そのとたん、「さあ、こんどはわたしのばんよ。」と、だしぬけにうしろで聲がしました。そうして、あっというまもなく、釣竿は、ジャンヌの手にとられていました。

＊ フランス(一八四四―一九二四)

218

においのある名前

ソログーブ＊

一

お百姓のちいさなむすめが、たいへんわずらっていました。神さまが、かわいそうにおおもいになって、ひとりの天使を呼んで、

「おまえ、下界へおりて行って、あのむすめに、ダンスして見せて、なぐさめておやり。」

と、おいいつけになりました。

けれどもその天使は、人間の子にダンスして見せるなんて、天使らしくもないとおもっていました。

神さまは、すぐと天使の心のうちをおさとりになったものですから、大そうおおこりになって、こらしめのために、その天使を人間界におくだしになりました。

天使はやがて、ある國の王さまの王女に生まれました。生まれたときには、もう天國のことも、むかしのことも、なにもかも忘れてしまって、おまけに自分のなまえまで忘れていました。

でも、天使のなまえは、人間のなまえとはちがって、それはきれいな、いいにおいのするものなのですけれど、そんなことは人間にはわかりませんから、このかわいそうな天使は、生まれるとさっそく、いやないやな人間のなまえをつけられてしまいました。天使の王女は、マルガリータ姫と呼ばれていました。

王女は、だんだん大きくなりました。

だんだん大きくなるうちに、王女は、ときどき、ものを考えこむくせがつきました。それがなんだという、はっきりしたあてはないのですけれど、なんだかすこしづつ、昔のことがおもいだされて行くようでした。それで、日にまし悲しくなって、なにかをつまらなくおもうようになりました。

あるとき、王女は、おとうさまの王さまにむかって、たずねました。

「どうしてお日さまは、ああしてただ光るばかりで、だまりかえっていらっしゃるのでしょうね。」

でもおとうさまは、にこにこ笑っただけで、なんにも答えてはくださいませんでした。

王女は、つまらなくなりました。

それからままたあるとき、王女は、おかあさまの女王さまにたずねました。

「いい香りにばらがにおいますことね。でもどうしてあの香りが見えないのでしょうね。」
こんどもおかあさまは、ただ、にこにこしておいでになりました。王女はかなしくなりました。

二

そのうち、この國では、王さまが、ばかなむすめを持っているというひょうばんがたちました。王さまは、王女を人なみのむすめにしようとおもって、それはいろいろにごくろうをなさいました。
でも王女はあいかわらずうつらうつら、ものおもいにふけっていて、ときどき、だしぬけに、役にもたたないきみょうな質問をしては、はたの人たちをまごつかせていました。
王女は、だんだん色が青ざめてきて、やみついたようになりました。それで世間では、王女はふきりょうになったという、ひょうばんをたてました。
そのくせ、王女をおよめにもらいたいといって、遠方の國からはるばるたずねてくる王子たちは、しじゅうたえませんでしたが、でも、いちど王女とあって話をすると、びっくりしてしまって、ほうほうのていで、逃げだして行きました。

いちばんおしまいにきたのは、マクシミリヤン王子でした。王女は王子にむかって、こういいました。
「人間の世界ってふしぎなものですね。ことばはただひびくだけでしょう。花はただにおうだけでしょう。わたし、あきあきしてしまいました。」
「では、あなたはなにをしたいとおおもいです。」と、こう王子はたずねました。
王女は考えこんでいました。それはずいぶんしばらく考えこんでいたあとで、こういいました。
「わたし、においのあるなまえがほしいとおもいます。」
「ほんとうですね。あなたには、においのあるなまえでなければにあいません。マルガリー夕なんて、いやですね。でも人間の世界には、においのあるなまえなんかないでしょう。」
そういうと、王女は泣きだしました。そのようすを見ると、王子はたいへん氣のどくになって、世界にこんなかわいらしい人はふたりとない、とおもうようになりました。
そこで王子は、なぐさめるように、
「泣くのではありませんよ。あなたのほしがっているものは、わたしがきっとさがしてき

ますから。」と、いいました。
すると、王女はにっこり笑っていいました。
「ほんとうに、においのあるなまえをさがしてきてくだすったら、わたし、あなたのあぶみにせっぷんいたしますでしょう。」
うれしまぎれにこうはいったものの、氣ぐらいの高い王女のことですから、はずかしくなって、かおを赤くしました。

三

そこで王子は、においのあるなまえをさがしに、はるばる旅にでて行きました。うまに乘って、世界じゅうの國ぐにをめぐりあるいて、ものしりも、ものしらずも、出あう人ごとに、においのあるなまえをしらないか、といってたずねました。しかし、どこへ行ってもそれはただ笑われるだけでした。
とうとうめぐりめぐって、もとの王女のいる町の近くにまでもどってきたときに、ふと見ると、みちばたに一けん、まずしい百姓の小屋があって、その戸口にひとり、雪のように

まっ白な髪の毛の老人が、立っていました。
このおじいさんなら知っているだろうと、ふと王子はそうおもいました。
そこで王子はうまをとめて、老人に、自分の用向きをいってたずねますと、老人はうれしそうに笑って、こういいました。
「ありますとも、ありますとも。そういうなまえはありますよ。においのあるなまえは、たしかにありますよ。それは孫が知っているはずですよ。」
王子は、小屋の中にはいると、病人のむすめが寢ていました。
老人はそのとき、むすめにむかって、
「ドニューシュカ、殿さまがな、いいにおいのするなまえを教えくれとおっしゃるのだ。おもいだして申しあげるがいいよ。」
すると、むすめはうれしそうに笑いました。けれどもいいにおいのするなまえは、どうしてもおもいだせませんでした。
そのとき、むすめの話では、そのまえの晩、夢の中にひとりの天使があらわれて、いろいろの美しい光でてらしながら、ダンスしてくれました。その天使がかえりしなに、あしたはまたもうひとり、べつの天使がきて、もっといろいろの色の美しい光でてらしなが

らダンスしてくれるだろう、その天使のなまえはこれこれだといってきかせました。そのなまえからは、それはそれは甘い、いい香りが流れだして、小屋じゅう一ぱいになって、むすめの心はきゅうにうきうきしてきたということです。

「それは考えてもたのしい心もちになるのでしたが、いまどうしてもそのなまえをおもいだすことができません。わたし、そのなまえをおぼえていて申しあげることができると、すぐ病氣がなおるのだとおもいます。でも天使はもうやがてきてくださるのでしょうから。」

こうむすめはいいました。

四

王子は、さっそく、王女のいる御殿へ行って、王女をさそって、また小屋へもどってきました。

王女はまずしい小屋の中にはいって、病人のむすめの姿を見ると、心の底からおさえきれないような同情が、むくむくとわきあがってきて、どうしてもその病人をいたわって、げ

んきづけてやらずにはいられなくなりました。

そこで、王女は小屋のまん中に立って、くるくるまわりながら、ダンスして、それに歌をあわせて手をたたきました。

するとむすめの目の前には、見る見るかがやかしいさまざまな光があらわれ、さまざまなやさしい音樂がきこえて、ひとりでに心がうきうきとうかれだしてきました。するうち、ふいと天使のなまえが、心にうかびました。むすめはわれしらず、大きな聲で、そのなまえをよびました。

するとまずしい小屋の中は、天國のようなやさしい甘い香りが、いっぱいあふれました。

こうして王女は、はじめて、忘れていた自分のなまえをおもいだしました。どうして自分が下界にくだされていたか、そのわけをすっかりおもいだしました。

王女は王子といっしょに、ゆかいそうにわらいながら、お城へかえって行きました。

それから、かわいそうなお百姓のむすめは、すっかりたっしゃになりましたし、王子と王女は、やくそくのとおり、結婚をすませました。

いく年かののち、天使の王女が、下界にくだされている期限がつきると、もういちど故郷によびかえされて、天國の神さまのおそばにかえって行きました。

219 羽根

ソログーブ

むかし、あひるを飼っているむすめがありました。あるとき、おいおい泣いていると、お百姓のむすめが通りかかって、たずねました。

「ばか、なにをぎゃあぎゃあいうの。」

「なぜ、あたしには羽根がないんでしょうね。あたし羽根がほしいのです。」と、あひる飼いのむすめはいいました。

「まあ、なんてばかな子だろう。人間に羽根なんかありはしない。どうして羽根がほしいのだろう。」

すると、あひる飼いのむめすは、こたえていいました。

「あたし、天までとんで行って、ありったけの高い聲で歌がうたってみたいのよ。」

「ばか、どうしておまえなんぞのからだに、羽根が生えてたまるものか。おまえのおやじは、ただの下男じゃないか。あたしなら、ことによると羽根が生えるだろうけれど。」

そこでお百姓のむすめは、泉水につかって、それからお庭の日の光のあたるところに立って、羽根が早く生えるように待っていました。

そこへ商人のむすめが通りかかって、たずねました。

「むすめさん、おまえさん、なんだってそこにそうして立っているの。」

「きっと羽根が生えて、とべるようになるの。」

商人のむすめは、しかし、笑っていいました。

「百姓の女が羽根がほしいんだって、——およし、そんなことはむだだから。」

そのむすめは町へ行って、バタを買って、それをからだにぬって、お庭へでて、羽根の生えるのを待っていました。

そこへ貴婦人が通りかかって、たずねました。

「まあ、おまえさん、そこでなにをしているの。」

「おくさま、わたくし、羽根を生やしていたところでございます。」

こう聞くと、貴婦人は、赤くなっておこっていいました。

「そんなことは、商人ふぜいのむすめのすることではない。貴族のすることです。」

貴婦人はおやしきへかえって、牛乳のお湯につかって、花園に出て、羽根の生えるのを

待っていました。

そこへ王女が通りかかりました。貴婦人が花園に立っているのを見ると、女官をやって、なぜ園の中に立っているのだといって、お聞かせになりました。女官はやがてもどってきて、「牛乳につかって、羽根を生やして、天までとぼうというのでございます。」こういいました。

王女は笑って、おいいになりました。

「ばかな女が、むだなことに骨を折るものだね。——ただの女に羽根が生えるものか。」

それからしばらくすると——その國のむすめというむすめは、あとから、あとから、お庭のひなたに出て、羽根の生えるのを待っていました。

この話を大空で天使がお聞きになりました。そこでとんできて、ようすを見ましたが、なにしろ羽根をほしがっているむすめたちが、たくさんの數なので、おどろいてしまいました。

「まあ、おまえ方のこらずに羽根をあげるのはいいけれど、それでは、あとにのこっておかゆをたいたり、こどものせわをしたりするものがなくなってしまうでしょう。だからいちばんはじめに羽根をのぞんだものにだけ、羽根をあげることにしよう。

さていちばんはじめに羽根をのぞんだのは、あひる飼いのいやしいむすめでした。そこでこのむすめは天の上までとびかけって行って、ありったけの高い聲で歌をうたっていました。

＊ロシア（一八六三—一九二七）

あとがき

（年代記と系圖）

序

話にしるしたように、「イソップ物語」には、これという原典はありません。ファエドルス、バブリオスの昔から、近世のはじめまで、イソップという名のもとにあつめられたたとえばなしを、おなじ話のいろいろ話しかえられたものをふくめて、すべてで四百二十話以上をあつめた、ドイツのカルル ハルムの本が、これまでいちばん大きなものでしょうが、さて、そのなかのどれが純粋のイソップであるか、たれにもいえないことでしょう。それでも、昔からのイソップ本にのっていて、多くの人に耳づいている話はまた、それだけにいいところもある話なので、そういうのをここにえらんで、百五十話とりました。そしてそれを、お話の中の主役によって、ししの王國（けものが主役のもの）、鳥、虫、魚および太陽と草木、人間と神様の三つに分けてのせました。また、この文庫のほかの集とのつりあいをもかんがえ、原話のみじかい格言風なのを、おとぎ話風にかきやわらげて、訓話の匂をうすくしました。つづく「かしこいイソップの世界へんれき」は、中世以

來あるイソップ一代記のおとぎ物語のなかからとりました。第三部の「イソップ風の物語」は、ふるいインドのジャータカから、近代の歐米作家の創作まで、イソップとしんるい筋の、またはイソップをまねてつくられた、おびただしいたとえばなしのなかから、五十話ほどぬきだして、加えました。

そうして、すべてで二百十九話、まずこれで、ギリシァの大昔から、二十五世紀もの間たどって來た、西洋のイソップおよびイソップ風のたとえばなしの、ざっとした道すじぐらいはわかるでしょう。東洋のたとえばなしについては、べつの一巻をもたなければなりません。

序話で書きたりなかったところを補いながら、次に、二千五百年のイソップ年代記を、その系圖とあわせて、ひととおりかいてみましょう。

西暦紀元前五五〇年頃　アイソーポス、(イソップ)、アジア半島のプリュギアに生まれる(?)インドでは　シャカが、やはりこの年代の降誕ということになっている。

前三〇〇年頃　ファレーロンのデーメトリオス、はじめて動物喩言ほぼ二百話を集めて、「アイソーポスの物語集」という。これがたぶんさいしょのイソップ物語(散佚)。インド

で、ジャータカ(本生話)の集められたのもほぼこの頃。

紀元一世紀　紀元三〇年頃、ローマ帝政のはじめ、ギリシャ人ファイドロス(ファエドルス)のラテン語自由短長律の韻文喩言集五巻九十七話。これに、後の人の追補三四十篇。これが現存の最も古いイソップ物語。しかし中世千年の間は埋没。韻文は散文にかきかえられ、原本は十六世紀また世に出た。ファエドルスの集からとった話は、本集一二話狼と小羊のほか數話、それにはファエドルスの名をかきそえてある。

同二世紀　ローマ皇帝マルクス　オレリウスに仕えた修辭學者ニコストラトスの「デカミチア(十卷の本。)」(散佚。)これはファエドルスのギリシァ系諭言集にたいしてインド系のユビセス喩言集」で、紀元五〇頃西洋に入って來たジャータカの一部が、これで一部の本にあつめられる。

同三世紀　二三〇年頃、バブリオスのギリシァ語韻文喩言集三百話。イソップとキュビセスをあわせたもの。ギリシァとインドがここで合流した(大部分散佚)。のちギリシァ散文にかきかえられて行われ、シリア、アラビアに入り、ロックマン聖者物語と化ける。十八世にまた世紀に出た。ブリバオスからとった話も、その名をかきそえて、本集に入てである。

四世紀末　アヴィアヌスの喩言集。バブリオスからインド系の話四十二話を、ラテン語韻文にしたもの。のち、散文にかきかえられ、さらに韻文になって各國を流れる。

十世紀　シャールマニュ大帝時代、ローマ人ロムルスの喩言集。ファエドルスから八十話をぬいて四巻にしたもの。これも今日行われるイソップのみなもと。

八ー十世紀　イソップ物語「獅子と狼と狐」（狐が狼の生皮を獅子にすすめる話）が、七八〇年頃ラテン語でかかれ、九四〇年頃、北佛ツールの修道僧、これにより「囚人逃亡（レクバシス カプチウイ）」のラテン語動物寓意譚をつくる。これが「きつねのさいばん」の先型となる。

十一世紀　インド系喩言集「パンチャタントラ」アラビア語よりギリシャ語に譯され、追追流布する。

一〇三〇年　アデマール　ド　シャバンヌ編喩言集六十七話。このなかに散佚したファエドルスの斷篇がのこる。

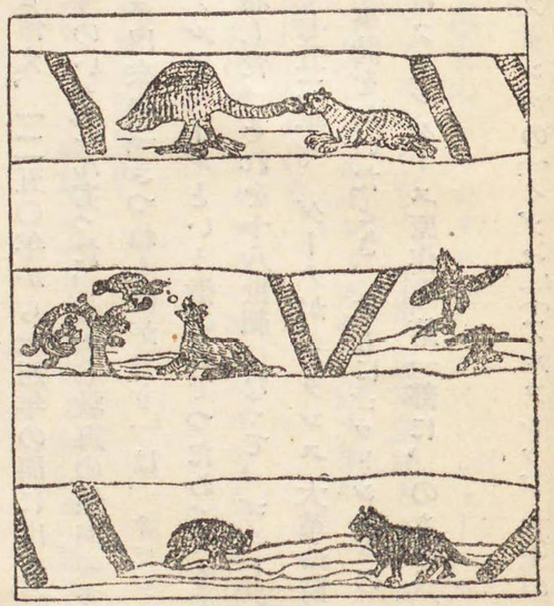
十二世紀　英人ウォルタのラテン語喩言集六十話。ファエドルスの改作。英國より大陸へ流行。

十世紀ー十三世紀　インド系の「ヒトバデーシャ」（よきおしえ）、アラビアを通じて歐洲に入る。「パンチャタントラ」の名をかえたビドパイ（ビルパイ）物語とともに、イソップにあるインド、アラビア系の喩言のみなもと。

十一世紀　ウィリャム征服王のイギリス攻（ノルマン侵略）の事蹟を、英女王マチルダが繪にして織ったという、バイユウ壁掛の縁飾りに、イソップ喩言の「狼と鶴」ほか十二話が織りこまれた。

一一四八年　ヘランダース（今のベルギーのガン市）の一學士（トギステル）ニヴァルヅス、ラテン語の動物物語「イセングリムス」をつくる。動物に人名を用いるほか、「きつねのさいばん」物語のだいたいが形づくられる。

「きつね（ロマン・ド・ルナール）ものがたり」として、今の形にちかいものをさいしょに作りだしたのは、フランスの幾人かの學僧たちで、なかでピェール　ド　サンクルウが名だかい、二十六—八の



バイコウ壁掛縁飾りのイソップ繪

枝物語(フランシコ)に分かれて、すべてで、四萬句、一一七〇年代から一二五〇年代の間に出來、十三世紀の末さらに、續篇の物語が三、四篇べつにかかれている。これが、十二世紀の末頃から、ドイツ語の「ラインハルトぎつね」になって外國へ流れた。

このフランスの「きつねものがたり」が、もとのフランダースにもどって、そこでかき直されて、二部から成る「レイナルド(ファン・デン・フォス・レイナエルデ)ぎつねの物語(エルデ)」になった。初めの部分の作者は、アエルノートと、ウィレムの二人であったと傳え、一二五〇年から七四年の間に出來た。のちの部分は、一三七〇年頃、ほかのぎりょうのいちだん劣った、しかし教誨の傾向のずっと強い作者の手でできた。このフランダース出來の「きつねものがたり」は、オランダで散文にかきかえられ、ヒンレク ファン アルクマールという僧の名でつたわったものが、低地ドイツ語に譯せられて、ドイツに流布した。それを十八世紀になって、ゴットシェットが、近代高地ドイツ語の散文に譯した(一七五二年)。ゲーテが、フランス大革命時代の世相を諷して、「ライネッケぎつね」の敍事詩をかいたとき、おもにゴットシェットの譯によった。その十二歌あるうち、前の六歌はフランダース原作の第一部に、のちの六歌はその第二部にほぼあたるという。

一二〇〇年 フランスの女詩人マリイ ド フランスの「イゾペ」(アルフレッド大王の名で

つたわるイギリス譯のイソップからの移植)。

一四八〇年 ドイツ、ウルムの町醫で人文學者のハインリヒ シュタイン ヒョーユル編の「エゾペス」。古代のファエドルス、バブリオスからのち、中世、近東諸國とアラビアから寄生して來た話を加えて、ギリシァ系、アラビア系インド系喩言の大集成。シュタインヒョーユル本は、次の六つの部門に分かれる。

A イソップ一代物語(十三世紀ビザンツの學僧マクシモス プラヌウデース作るというもの。)

B ロムルスの喩言集(実はファエドルスの散文改譯)

C ファブラ エクストラヴァガンテス(びっくり物語)。「きつねのさいばん」風の動物諷刺物語。

D ギリシァ散文のイソップ(実はバブリオスの原韻文を書き崩して、流布させたものによる。)

E アヴィアヌスの喩言集(インド系のリビア喩言集)。

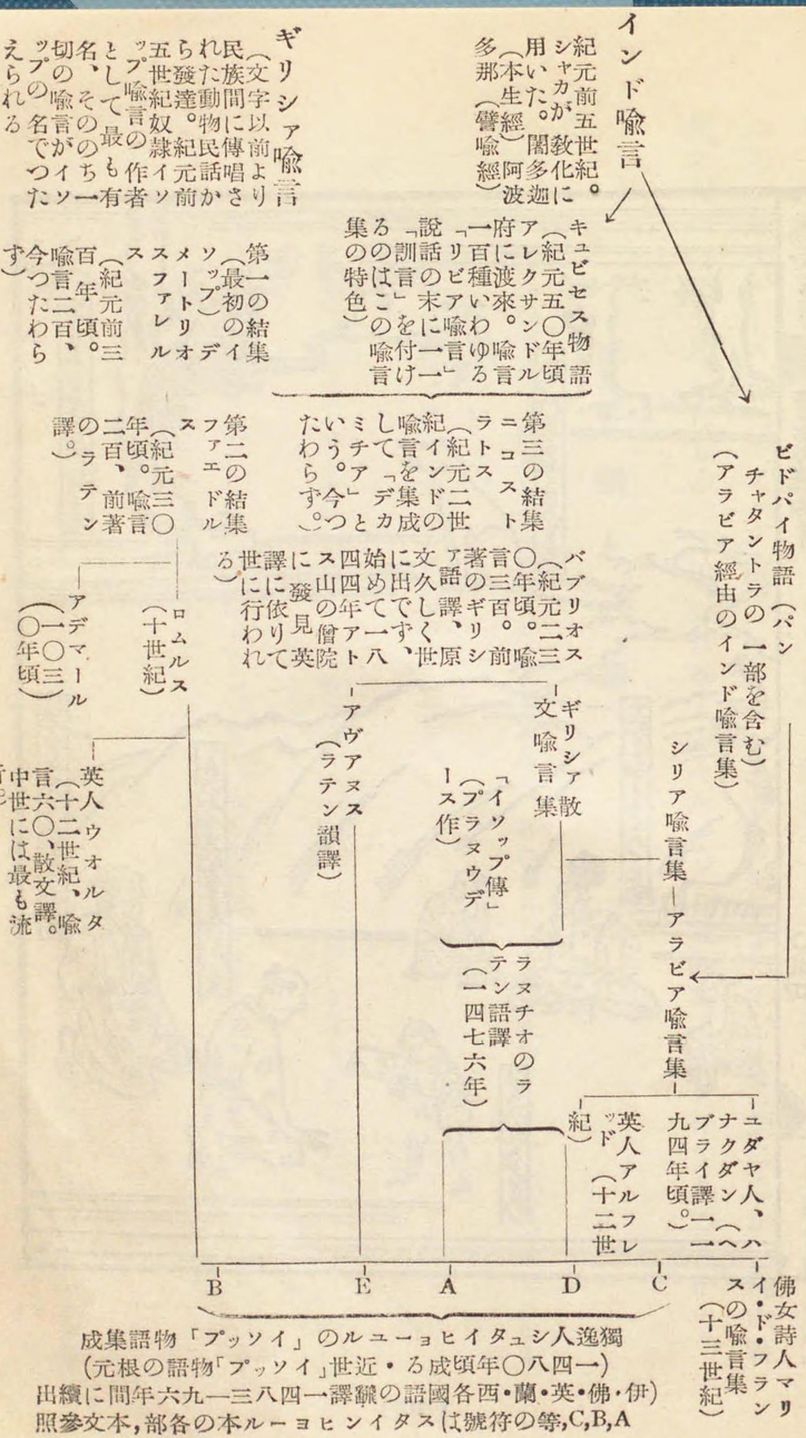
F 十二世紀の頃イスパニアに居住したユダヤ人アルフォンシ及びラッチオリニ編の、世談笑話集(東洋ことにインド系のもの)。

一四八一年　イギリス出版印刷業の元祖ウィリャム　カクストンが、フランダース系の「きつねものがたり」を、低地ドイツ語の散文譯本によって、英譯出版した。

一四八四年　カクストンはさらに、前記シュタインヒョーユルの本を、フランス、リョンの僧マショウが佛譯したものにより、英譯出版。これが流布する英語イソップのもとになった。ふつうのイソップ本に、本來のイソップとかんけのない近東輸入の喩言と笑話のまじっているのはこのためである。カクストンにつづいて、イタリア、イスパニア、ドイツ、オランダ各國語のイソップが出來、十五世紀末には、全ヨーロッパにひろまった。そののち發見されたギリシア語の喩言集からの增補も、その間にぽつぽつおこなわれた。

一五九三年　（文祿二年）日本語譯のイソップ（日本ではじめて紹介された西洋文學。）"Esopono Fabulas"（イソポノ　フワブラス）（新村出博士編、開成館版「文祿舊譯伊曾保物語」のち改造社版「天草本伊曾保物語」）文祿二年天草耶蘇會學林開板。原書ローマ字でつづり、おなじ天草出版の「平家物語」と合綴、これだけで雁皮摺（がんぴずり）小形本九十七頁、現に大英博物館に珍藏されている。先年わが新村博士この原本を筆寫してかえり、そののち全部を國字にかきあらた

「イソップ物語」の系圖



め「文祿舊譯伊曾保物語」と名づけて公刊。喩言七十、べつに「イソポが生涯の物語略」（プラヌウデースの「イソップ傳」。ラテン文の喩言集によって、狂言詞にちかい桃山時代の輕い俗語で譯したもの。譯者は日本人のイルマン（牧師）ハビアンであるという。

蟬と蟻との事

ある冬の半ばに、蟻どもあまた穴より五穀を出して、日にさらし、風に吹かするを、蟬が來てこれをもろうた。蟻のいうは、

「ごへんは過ぎた夏、秋は、なに事をいとなまれたぞ。」

蟬のいうは、

「夏と秋の間は吟曲にとりまぎれて、すこしも暇を得なんだによって、何たる営もせなんだ。」

という。蟻

「げにげにその分じゃ、夏秋うたいあそばされたごとく、今も秘曲をつくされてよかろうず」

とてさんざんに嘲り、すこしの食を取らせてもどいた。

下心

人はちからのつきぬうちに、未來の務めをすることが肝要じゃ。少しのちからと閑あるとき、なぐさみを事としょう者は、かならずのちに難を受けないでは叶うまい。〔文祿古譯本〕

一六〇一―二五年（慶長―寛永）「伊曾保物語」（第二の日本語イソップ）三卷。譯者不明、京都の公家衆（烏丸光廣？）かという。江戸初期の假名草子風の俗文體。慶長初年成るか。喩言六十四、文祿版とは體裁も喩言の內容もちがうが、卷頭はともに例の「イソップ傳」（全三卷の半以上。）

この「伊曾保物語」には、元和版、寛永版、萬治版その他いろいろあるが、みなおなじ原書の改刻。萬治二年新刻本が、西鶴物に見るような浮世草子式の挿畫十數葉を挿むのが異色。挿畫の模樣をすっかり時代の風俗に直し、イソップをお坊主と太郎冠者を一所にしたような風体にえがき出す。雛屋立圃の意匠かという。

なお文祿本と、この「伊曾保物語」とを比べて見ると、前者はバブリオスのギリシア韻語喩言集に「イソップ傳」を加えたイタリアのラヌチオのラテン譯本によったらしく、後者は、ただちにシュタインヒョーユルが集成本によらないまでも、ともかく集成本ができて以後の新譯本によったとみえる。したがって文祿本には、本來の「イソップ物語」の面目を存し、慶元萬治本には、中世紀に流行した東洋種その他の雜話をまじえている。

以上のほか、江戸時代のイソップ文獻としては、雛屋立圃作伊曾保物語の繪卷物があり、爲永春水作と稱する草双紙「繪入教訓近道」に、イソップ喩言の飜案があるという。

（新村博士「西洋文學飜譯の嚆矢」）

にわとり と きつね

あ　ある時きつね、えじきをもとめかれて、ここかしこをさまようところに、にわとりに行きあいたり。えたりやかしこしと、これをとりてくらわんとす。にわとりこのことをさとりてある木の枝にとびあがりぬ。きつれ手をうしなうて、せんかたなさに、所詮たぶらかしてこそ喰わめと思いてかの木の本に立寄りて、いかににわとりきこしめせ、このごろよろずのけだものの、中なおりする事あり、ごへんは知り給わぬか、ひさしく申承わらぬに依て、わざわざとこれまで參りて候、といとむつまじげに語りければ、にわとり、狐のぶりゃくをさとって、まことにかかる折節に生れあいぬる事こそめでたう候え、よくあいたり、犬、よきようにはからい給うべしといいて、更におりず。狐かされて申しけるは、まずここへおりさせ給え、ひそかに申すべき事有と、しきりによべどもついにおりず。にわとり用ありそうにあなたをながめければ、狐下よりみあげて、ごへんは何事を見給うぞと申しければ、されば只今ごへんの物語し給う事をつげしらせてとや思われけん、犬二疋はせ來られ候と申しければ、きつれあわてさわいで、さらばまずそれがしは、御いとま申すとてさらんとす。にわとり申しけるは、いかにきつれ、鳥けだものは中なおりしけるに、そのおりふし何事かは候うべき、そこにまちて、犬とまじわり給えとささえければ、きつれかされて申すよう、もしかの犬、中直る事知らずば、我がためにあしかりなんとにげさりぬ。そのごとくたとい人にあだをなすべき者とさとるとも、あだをもってむかうべからず。武略にてむかわば、我もぶりゃくをもってしりぞくべし。〔萬治古譯本〕

さる と にんげん

むかし正直なる人、そらごとのみいう人とありけり、この二人、さるのあるところに行きける。然るに或木のもとに、さるの數多なみいる中に、秀でおのおのうやまうさるあり、かのうそつく人、さるのそばにちかづきて例のうそを申しけるは、これにけだかく見えさせ給うは、ましら王にてわたらせ給うか、その外、面面見えさせ給うは、月卿雲客にてわたらせ給うか、あないみじき有樣ぞとほめける、ましらこの由をきいて、にくき人のほめようかな。これこそまことの帝王にておわしませとて、引出物などしける。しかるをかの正直なる者思うよう、これはうそをいうだに引出物出したりければ、まことをいわんに何しにかは得ざらんとて、かのさるのほとりに行きて申しけるは、面面のうちに年たけよわいおとろえてくびのはげたるもあり、さかんにしてよくよく物まねするべくもありなんとぞ、ありのままに申しければ、ましら大きにいかって、さるどもいくらもむさぶりかかりて、ついにかきころしぬ。そのごとく、人のよにあることも、こびへつらうものはいみじくさかえ、すなおなる者はかえってがいをうくることあり。この義をさとって、すなおなる上にまかせてくゆることなかれ。〔萬治古譯本〕

一六二五（明代・元啓五年）　イソップの漢譯「況義」

一六四四　「パンチャタントラ」のアラビア改譯本「ビドパイ物語」のフランス語譯。

一六六八—九四　フランスのジャン　ラ　フォンテーヌの喩言集（一—六卷、一六六八年。七—一一卷、一六七八年。一二卷、一六一五年）。二百四十話。古代のイソップ風喩言を近

代文學に再生させた最初の本。イソップ、ビドパイ、それとフランス、イタリアの古譚集が材料。ルイ十四世の太子にささげたもの。優雅と諧謔をまじえたなめらかな韻文で、ゆたかな實生活の知識を、こまごまとおもしろく語るという人生隨筆で、ことに教訓を強いることはない。十七世紀末から十八世紀にかけて、イソップ風文學が英國から大陸にかけて流行したのは、ラ　フォンテーヌの感化である。フランスでは、そののち、フロリアン（ジャン　ピエール　ド）が有名で、

一七二六　イギリスのジョン　ゲイの喩言詩集。若いカンバランド公子にささげたもので、ことにこどものためにかかれている。この人はイギリスのイソップといわれる。

一七四六—四八　ドイツのゲレルト（クリスチアン　フュルヒトゴット）の「たとえばなしともものがたり」。この人の喩言は、ドイツでもっとも民衆に親しまれている。おなじ七四八年に、リヒトウェル（マグヌス　ゴットフリート）も、イソップ風喩言集を出した。この人のは創作の話が多い。

一七五九　ゲーテ、シラァに先立って出て、近代ドイツ文學の父となった。ゴットフリート　エフライムレッシングの喩言集が、その名だかい喩言論といっしょに出た。喩言の數は九十。喩言論は喩言の本質、動物の使い方、分類、語り方、學校における效用の五項につ

いて語っている。ラ　フォンテーヌ流の飾り多い凝った擬古文體喩言の詩流行に背をむけて、ギリシア古代の簡朴にかえり、イソップの形と心を新しくつかみ直そうというのが主意で、フランス流でないドイツ古典主義を打ち立てる上の、ひとつの試み。かんけつな格言風がイソップ風喩言の精神で、それは「詩と道德のさかいの小徑」だといった。しかしこれにははんたいも多く、兄グリムなどは、お話のなかから、しぜんに教えのながれだすところに味わいがあるので、教えを待ちかまえてお話をきくのでは、話がぎゃくだといった。

一七八二　イスパニアのイリアルテと、イタリアのピニョッチの喩言集。

一八〇九—四三　ロシアのイワン クルイロフの喩言集。最後の版は百九十七話をふくむ。イソップ風のたとえばなしは、ラ　フォンテーヌ—レッシング—クルイロフと、それぞれ立場はちがいながら、つづいて來て、そこでいちおう終止したかたちになった。こののちになると、トルストイもソログーブも、イソップからはなれて、かれらの喩言を作っている。トルストイには動物實話風のものが多い。

二十五世紀にわたるイソップ物語の傳統はひとまずこれでうち切られて、新しい形式の最近代喩言の工夫へむかうことになる。

一八四〇年（清代道光二十年）　イソップの漢譯「意拾喩言」

一八五二年　ドイツの古典話學者カルル　ハルム、イソップ物語の大集成本をつくる。

一八七三年（明治五年）近代日本最初のイソップ、渡邊溫新譯の「通俗伊蘇普物語」。木版本六卷。猩々曉齋畫明治五年新刻。喩言二百三十七。かるい假名まじりの通俗文體で、對話などもきびきびした江戸言葉が、一九か三馬の滑稽本を讀むよう。曉齋の繪もおもしろい。なお譯者渡邊氏は、同時にこの書の支那時文譯をくわだて、中田敬義氏に囑して、「北京官話伊蘇普喩言」として明治十一年出版した。

一八八八年（光緒十四年）イソップの漢譯「海國妙喩」

一九〇二年（同二十八年）同「伊索寓言」

一九〇六年（同三十二年）「東方伊朔」（これは、イソップの喩言でなく、中國古代の諸子百家の書から、イソップ風の寓言をあつめたもの。）

あ

饗蜚に招ばれた犬の話

る大家ごちそうを設け友人を招きしに、友人の飼犬主の後について同じくその家に入來れり。その主家の飼犬も我が主の脇に立ちて、友犬を出迎え、

ししの王國索引

イソップ物語畫集

序　話　イソップ物語のおいたち話

I イソップ物語

ししの王國

1. にくを はこぶ犬 …… 3
2. 犬 と にわとり と きつね …… 4
3. ごちそうに よばれた犬 …… 5
4. 鈴を つけてもらった 犬 …… 7
5. どろぼう と かい犬 …… 8
6. おなかのすいた 犬 …… 9
7. 百姓家（ひやくしようや）の かい犬 …… 10
8. いのしし と きつね …… 11
9. うさぎ と かめ の きょうそう …… 12
10. うさぎより よわい かえる …… 14
11. 牡牛（おうし）車のしんぼう を しかる …… 15
12. おいぼれ馬 の なげき …… 16
13. 馬のおいしゃになった おおかみ …… 17
14. おおかみに 出あった 小ひつじ …… 18
　I. おおかみ 小ひつじに むりなんだいを いいかけること
　II. おおかみに であった 小ひつじ
15. じぶんの影（かげ）に おどろく おおかみ …… 21
16. おおかみが つるのおいしゃさまに したお礼（れい） …… 23
17. おおかみ 人間に だまされること …… 24
18. しっぽのない きつね …… 25

これはようおいでなされた。今晩は御一所にちそうをたべましょう」といえば、客方の犬謝辞をのべ、ちそうの用意があるのを見て、

「イヤア盛んな御料理だ。それはよい時候（おり）に参りました。ゆっくりといただきまして、今晩たんとたべおきをしましょう。明日はなにもたべものがありますまいから」とひとり言をいいながら、嬉しまぎれに尾をふると、そのふった尾が料理人の目にとまり、

料理人「イヤアこれはどこの犬だ」とズッとよってひっとらえ、窓の外へほうり出すと、近所の犬が数疋駈寄り、

「コウどんなごちそうを食いなさった」ときけば、ほうり出された犬は痛さをこらえにがわらいしながら、

「わしはどうして内から出たか知れぬ はどのみすぎたから、イヤモウ、とんとわすれました。」

ひとのしりについてはいるものは、窓からほうり出される憂があります。（明治五年版通俗伊蘇普物語）

19. おなかのふくれた きつね …… 27
20. きつねのひろった お面 …… 28
21. ぶどうを たべそこなった きつね …… 29
22. きつねが はじめて ししに であったこと …… 31
23. きつね はりねずみのしんせつを ことわること …… 32
24. きつねが いばらにひっかかれること …… 33
25. 井戸にはいった きつね と 牡(おす)やぎ …… 34
26. きつね と こうのとりの お客さまごっこ …… 36
27. わし と きつねが お友だちになること …… 38
28. こ う も り …… 40
29. こうもりが 二ど いたちからのがれること …… 42
30. いるかに のったさる …… 43
31. おさるの赤ん坊 と ユピテル大神 …… 45
32. きつねのわなに かかった さるの王さま …… 46
33. さるの母 と 子 …… 48
34. 牡(おす)じかが 水かがみを うつすこと …… 49
35. 牛ごやに にげこんだ しか …… 50
36. ぶどうの木に かくれた 牡じか …… 52
37. びょきのしかを 友だちが 見まったこと …… 53
38. し し の 王 國 …… 54
39. おおかみ と きつね とししの王さまの ごきげんうかがい …… 55
40. ししが かえるを こわがること …… 58
41. ししにも にが手 ぞうにも にが手 …… 59
42. ししが 野うしを なかまわれさせること …… 61
43. し し と ろばが なかまになること …… 62
44. し し と ろば の えもの …… 63
45. し し と きつね と ろば …… 64

46. ししの おんがえし …… 66
47. ししが ねずみに いのちを たすけられること …… 70
48. おいぼれじし …… 71
49. 年よりじしの ほら穴を たずねた きつね …… 72
50. 一ぴきでも ししの子 …… 73
51. とりの びょうきみまいに ねこの おいしゃさま …… 74
52. こな袋(ふくろ)に ばけたねこ …… 75
53. わし と ねこ と 野ぶたのより合いじょたい …… 77
54. ねこ と きつね の 旅 …… 79
55. 人間のむすめに なったねこ …… 81
56. いなかへでた 町ねずみ 町へでた いなかねずみ …… 82
57. ねずみが ねこのくびに すずを かけるそうだん …… 86
58. 犬をうらやむ ひつじ …… 88
59. ひつじさいばん …… 90
60. ひつじのむれに まよいこんだ ぶた …… 92
61. もぐらもちの子は もぐらもち …… 93
62. こやぎの踊(おどり)に笛(ふえ)をふく おおかみ …… 94
63. やねの上の こやぎ と おおかみ …… 96
64. めすのやぎが ひげをはやすこと …… 96
65 おおかみ と 山の上の めやぎ …… 97
66. らくだ と にんげん …… 99
67. ら ば …… 100
68. ろば と らばの道づれ …… 101
69. ちんの まねをして ぶたれたろば …… 102
70. ししの皮を かぶる ろば …… 105
71. ろばの ふたつの にもつ …… 106
72. たれが ましか ろばと 尾ながざる と もぐらもち …… 107

73. 神さまの お像をはこぶ ろば……107
74. ろばを買う人……108
75. ろば と きりぎりす……109

鳥 虫 魚　太陽と草木

76. うぐいすが たかにいのちごい すること……113
77. うぐいすが つばめのさそいに のらぬわけ……114
78. 金のたまごを うむがちょう ……115
79. からす と きつね……116
80. からすが かめのそこの水を どうしてのんだか……118
81. からすが わしのまねをして ひつじをさらおうとしたこと ……119
82. くじゃくにばけた あほう がらす……120
83. 王さまに なりそこねた くじゃく と かささぎ……122
84. くじゃく と つる……123
85. くじゃくユノー女神にうったえること……124
86. たかを ばんにんに たのんだはと……126
87. たかにとられた ひばり、鳥網にとられたたか ……127
88. たたかう 二わのおんどり と わし ……128
89. にわとりの ほりだした 寶石……129
90. はくちょう と がちょう……130
91. はとが ありに たすけられたこと……132
92. ひばりおやこの おひっこし ……133
93. ふくろうが 森の鳥たちを いましめること……136
94. あり と せみ……138
95. あぶにまけた しし、くも にくわれた あぶ……140
96. 牡牛のつのに とまった蚊とんぼ ……142
97. かえるども 王さまを ほしがること……143
98. 牛のように 大きくなろうとした かえる……145

99. 野うしのあらそいを かえるどもが こわがること……147
100. おいしゃさまになった ぬまのひきがえる ……149
101. かにのかあさんが むすめに おしえたこと……150
102. かめが わしに そらをとぶじ つを ならうこと ……151
103. はち と へびの ごうじょうくらべ……152
104. やまあらし と へび……153
105. 大男のふとももを さした のみ一ぴき……154
106. へびのしっぽが あたまにかわること ……155
107. ふまれるへびが ユピテル大神に うったえること……156
108. まむし やすりに ねだること……156
106. 釣られた 小魚の いのちごい……157
110 いるか と くじらの あらそいに 小いわしが 仲にはいること ……158
111. 北風 と お日さまの かけ ……159
112. 河　と　海……162
113. 身から出た おのの柄 ……163
114. もみの木 と 木いちご……164
115 1. こうまんな かしわの木 と けんそんな あし ……165
2. かしわの木 と あしの葉 ……167

人間 と 神さま

116. よくない」先生「よくなる」先生 ……173
117. 神さまをよぶ 牛方 ……174
118 ひとりの男 と ふたりの女……175
119. 女主人と 女中 と にわとり ……176
120. 正直な 木こりに 神さまの ごほうび ……177
121. ふた心のある 木こり と きつね ……179
122. かぜをひいた クロンボの子 ……181

123. おぼれかけている こどもを しかる先生……182
124. しょうばいちがい……183
125. くまに出あった ふたりの 旅びと……184
126. ちちしぼりの むすめが ちち壺を こわすこと……185
127. 井戸におちた 天文学者……187
128. まむしに さされた 鳥さし……188
129. 農夫の いいのこした ふたつのおしえ……189
I. まことのたから
II. ひとたばの たき木と三本の 木の枝
130. きつねを焼く農夫 畑を焼く……191
131. 農夫 と へびが かたき同士……192
132. ろばを賣りに出た 水車やのおやこ……193
133. のらくらもの つばめを うらむ……197
134. はげあたまの紳士が かつらを とばしたこと……198
135. うそつきな 羊かいのこども おおかみに ひつじを とられること……199
136. 海にだまされた 羊かい……201
137. ひつじかい おおかみのまい子を そだてること……202
138. やぎのつのを おったやぎかい……203
139. 弓の名人 と しし……205
140. ほりょになった ラッパ手……206
141. ふえをふいて さかなを おどるらせようとした りょうし……207
142. お 金 の 番 人……208
143. なぜ「悪」がはびこり「善」がひっこむか……210
144. どちらも立たぬ……212
I. ふりわけたふたつの袋

II. せともの の壺 と しんちゅうの壺
145. 手足が おなかに むほんしたこと……213
146. 山 の お 産……215
147. 福の神さまの 木像を うる男……215
148. ペテン師 の手じなに 神さまはのらぬ……217
149. びんぼうじいさんと 死神……218
150. 人間を うたがう 森の神……219

II かしこいイソップの世界へんれき

151. にんげんか ばけものか……223
152. いちじくどろぼう……224
153. イソップの舌……226
154. かるい荷もつ おもい荷もつ……227
155. たれが りこうか……229
156. 舌 舌 舌……230
157. なんにも 苦にしない男……232
158. 大海の水を のみほす話……234
159. わしにさらわれた 指輪……236
160. おおかみ と ひつじの 仲なおり……240
161. せみ と いなごとり……241
162. イソップのへんれき……243
163. 空 の 上 の 塔……245
164. エジプトの猫 バビロンの馬……246
165. 十二の町で かこんだ寺……247
166. たれもきいた ことのない話……248
167. 海の上の 浮き木……250
168. お友だちになった ねずみ と かえるが とびにさらわれる話……252

169. かぶと虫が わしのたまごを こわす話……253
170. イソップの血 ……256

III イソップ風の物語

171. うさぎの ささげもの …(ジャータカ)……259
172. あいがめにおちた さい (豺)…(パンチャタントラ)……263
173. とらになった ねずみ と 仙人…(ヒトパデーシャ)……267
174. さそり と かめの 旅…(ビルパイ物語)……270
175. 小鳥のおしえた…(ゲスタ ロマーノルム) ……272
三つのことば
176. おなかのなかのからすが とびだす話…(〃 〃)……274
177. アレクサンドル大王の お墓で…(〃 〃)……276
178. つばめ と くも…(アプステミウス)……278
179. お百姓の男とたか …(〃 〃)……279
180. かみそり …(レオナルド ダ ヴィンチ) ……280
181. 主人のべんとうを はこぶ犬 …(ラ フォテーヌン) ……282
182. つののような うさぎの耳…(〃 〃)……283
183. さる と ねこ …(〃 〃)……284
184. 二羽のはと …(〃 〃)……286
185. 一本の丸木橋を わたろうとした…(〃 〃)……291
二ひきのめやぎ
186. うさぎ と うさぎ …(ゲイ)……293
187. こども と ちょう …(ドヅリ)……295
188. みどり色の ろば…(ゲレルト)……297
189. おどりぐま …(〃 〃)……299
190. うま と あぶ… (〃 〃)……301
191. めくら と ちんば …(〃 〃)……
192. いたち と めんどり …(リヒトウエル) ……

193. おいぼれおおかみものがたり…(レッシング)……305
(七つのたとえばなし)
194. いばらとやなぎ …(〃 〃)……314
195. 小夜啼鳥とくじゃく …(〃 〃)……314
196. わし と はと …(ゲーテ)……315
197. ねずみ と ぞう…(ピニョッチ)……318
198. くま さる ぶた …(イリアルテ)……320
199. かも と へび… (〃 〃)……322
200. ろば と 笛…(フロリアン) ……323
201. ふたりの百姓 と あやしい黒雲 …(〃 〃)……325
202. おおかみと にんげん…(グリム)……326
203. いそがばまわれ 釘一本…(〃 〃)……329
204. むぎのほの ちいさいわけ…(〃 〃)……332
205. そ ば の 木 …(アンデルセン) ……333
206. おさるのめがね …(クルイロフ)……338
207. 四 部 合 奏 …(〃 〃)……340
208 木の葉 と 木の枝 …(〃 〃)……342
209. 幸福の訪問 …(〃 〃)……345
210. たこのじまん …(〃 〃)……348
211. 山 と 小りす …(エマスン)……349
212. かしわの木 と はしばみ …(トルストイ) ……351
213. めくら と 牛乳 …(〃 〃)……353
214. 本 ……(〃 〃)……354
215. うたのない 世の中は つまらぬ 世の中(〃 〃)……355
216. おたまじゃくし と かえるの問答…(スティブンスン)…356
217. 釣に出た あにいもうと…(フランス)……357
218. においのある名前 …(ソログープ) ……360

納本

世界おとぎ文庫
（イソップ物語篇）
ししの王國

昭和二十四年五月二十五日印刷
昭和二十四年六月一日發行

定價三〇〇圓

編著者　楠山正雄
東京都新宿區四谷舟町六ノ六
發行者　小峰廣惠
新潟市東堀前通九番町
印刷者　高橋鋭二
東京都新宿區四谷舟町六ノ六
發行所　小峰書店
振替東京一九五五四四番

本社刊行圖書中落丁亂丁破損本等は
本社へ御申越次第お取替致します

219. 羽　根（ハネ）…（〃　〃）……368
220. きつねのさいばん…（中世古譚）
あとがき

世界おとぎ文庫目録

（※印は既刊）　各巻定價　概算三〇〇圓　〒二〇円

B6四五〇頁

1 アポロのたて琴　ギリシア・ローマ神話集
2 オデイシウスの大弓　ギリシア・ローマ傳說集
3 天の浮橋　東洋諸國神話集
4 雲の柱・火の柱　舊約、新約聖書物語
※第三回配本
5 ししの王國　イソップ及イソップ喩言集
6 のろわれた寶　ゲルマン民族神話傳說集
7 白鳥騎士　アーサア物語シャルルマニュ傳說他
8 聖母の繪像　中世民譚、聖母奇蹟譚、聖者物語
9 魔法の馬　アラビヤンナイトの物語
10 妖女のおくりもの　フランス、南歐童話集
11 ※第二回配本
森の小人　グリム童話名作集
12 大男と一寸法師　イギリス、アイルランド、スコットランド、アメリカ童話集
13 北風のところへ行った少年　北歐、スラヴ童話集
14 ※第一回配本
人魚とお月さま　アンデルセン童話名作集
15 羅生門の鬼　今昔物語日本古譚集
16 かぐや姫の天上　日本童話
17 お猿の仙人　西遊記支那童話集
18 狐の裁判　狐物語、未開民族の動物譚
19 ゆりかごの物語　こどもにきかせる歌とお話
20 ゆりかごの歌　童謠、兒童詩
21 童話小說集　追補四卷の豫定

（但、人魚とお月さま　定價　二五〇円・森の小人　二八〇円）

小峰書店

児93-K-16
1200600488248